

白内障などが出現。44才ウェルナー症候群と診断。49才当科入院。H8.11月心内膜下梗塞発症。この頃より軽度の痴呆症状（MMSテスト17点）を認め、MRI・SPECTの所見よりピンスワンガー型脳症と診断。その発症に本症候群に特徴的な動脈硬化症の関与の可能性が考えられた。

73. 同種骨髄移植後に再発を来した急性骨髄生白血病に対するドナーリンパ球輸注

池田 啓（千大）

平成3年10月発症のAML（M2）。第3回再発後平成7年8月R-BMT施行，day58，72にDLTを施行した。経過中acute GVHD gradeⅢを発症，chronic GVHDに移行するも原病に関してはCRを維持していた。平成9年3月第4回再発を来し，化学療法にてCRとなったためDLT目的で当科入院となった。入院後第5回再発を来し化学療法後，計4回のDLTを施行したところ現在もCRを維持している。

74. 骨髄移植後に再発し，免疫抑制剤中断後肺病変を来した急性骨髄性白血病の1例

鐘野勝洋（千大）

46歳男性。平成3年6月発症のAML（M4E）。平成9年2月3rdCRでUr-BMT施行したが，day146で再発した。GVL誘導を図りCyAを中断したところ，再寛解が得られた。一方，GVHDによる間質性肺炎が増悪し，ステロイド投与により改善した。免疫抑制剤中断によるGVL効果が移植後再発のコントロールに有効であった反面，合併するGVHDの治療に苦慮した症例である。

75. CHOP療法が著効を示したATLL

日暮真由美（千大）

48才女性。次第に増大する口腔内腫瘍を自覚し，当院耳鼻科を受診。NHLと診断され化学療法目的で当科入院となる。Atypical Lym 10%，HTLV-1（+），pro-virus DNA（+）よりATLLと診断した。CHOP療法4クール施行後，CT上上咽頭腫瘍は著明に縮小し，Ga scanでも集積は消失した。治療抵抗性が多いATLLで化学療法が著効を示した症例である。

76. 化学療法により寛解が得られたbilineage leukemiaの1例

藤田昌敏（千大）

症例18才女性。平成9年1月急性白血病を発症。芽球はペルオキシダーゼ染色陽性で急性リンパ性白血病

が示唆されたが，白血球表面マーカーの検討によりbilineage leukemiaと診断された。化学療法2コースにて寛解となり，その後寛解を維持している。bilineage leukemiaはその寛解率・予後とも不良であることが報告されている。今回我々は化学療法にて寛解に導入し得た症例を経験したので報告する。

77. 末梢血幹細胞移植を行った慢性活動性EBV関連リンパ腫の1例

宮澤さおり（千大）

26歳，女性。H4年頃より繰り返す発熱，咽頭潰瘍にて発症しEBVの抗体価より慢性活動性EBV感染症と診断した。H9.3月頸部リンパ節の腫脹，LDHの上昇がみられリンパ節生検にてNHLと診断された。診断後計4回の化学療法を施行したが効果は一過性であり，H9.8.11HLA一致の妹をドナーとしPBSCTを施行した。移植後リンパ節腫脹の消失，LDHの減少，PCRで末梢血中よりEBVの消失が認められた。

78. 特異な内視鏡像を呈し，手術に至ったCrohn病の1例

荻野 淳（千大）

症例は20才女性，水様便を主訴に来院した。注腸造影にて，直腸～S状結腸に15cmの著明な狭窄，瘻孔を認め，精査加療目的に，当科入院となった。入院後，消化管造影・大腸内視鏡を行い，小腸大腸型Crohn病を疑ったため，絶食・IVH管理で，経過観察したが，症状の改善は認められず，内科的治療は困難と判断し，回盲部切除，S状結腸切除術を施行した。術中診断はCrohn病であった。

79. 特異な内視鏡所見を呈した蛋白漏出性胃腸症の1例

吉田知彦（千大）

原発性蛋白漏出性胃腸症はリンパ系の形成不全や閉塞のためリンパ流がうっ滞し，蛋白等の物質が漏出することにより，低蛋白血症，免疫異常，浮腫を呈する疾患である。我々は今回，内視鏡にて十二指腸及び大腸に多数の嚢胞状粘膜下腫瘍の存在を確認し，中鎖脂肪酸製剤による治療にて臨床症状の改善を認めた。十二指腸・大腸の病変は，リンパ流のうっ滞による変化であることが示唆される。

80. 難治性潰瘍性大腸炎の1例

小林照宗（千大）

18歳男性の症例。ステロイドにおける強力静注療法